

# 読者、著者、学会が三方良しの Analytical Sciences



藪谷 智規

Analytical Sciences 誌の副編集委員長の藪谷智規です。安川智之先生(兵庫県大)からバトンタッチを受けて今年度より就任いたしました。なお、今年度から副編集委員長2名体制となり、もう一人の副編集委員長の北川慎也先生(名工大)、委員長の長谷川健先生(京大)とともに編集にあたっております。

本誌の現況といたしまして、2020年 Journal Citation Reports インパクトファクターは過去最高の2.081となりました。なお、昨年(1~12月)の総投稿数は597編、総アクセプト数は264編となっております。投稿数は、一昨年(697)、昨年(587)であり、年間600~700報程度で安定して推移しております。投稿国別としては、日本(197編)を含め44か国から投稿されており、国外からは中国が一番多く173編(29%)、インド41編(7%)、トルコ23編(4%)、エジプト20編(3%)、イラン18編(3%)、タイ15編(3%)など、アジア、中東域から多くの投稿を集めております。ちなみに、10年前(2009年)の国別投稿実績(長岡勉先生、本誌2010年9月号とびら)として、中国35%、イラン6%、インド3%、スペイン3%、ブラジル3%が挙げられており、当時と比較して中国断トツの状況は変わらず、インド、トルコの投稿数の増加が多くなっております。一方、近年では欧米諸国からの投稿が軒並み1%以下となっており、今後はこれらの地域への広報活動のテコ入れを図る必要があります。

本誌では2016~2020年に科学研究費補助金「国際情報発信強化」の支援を受けて論文配信力強化に着手いたしました。その一環として、本年1月号には分析化学会の研究懇談会から推薦された執筆者による総説特集号を企画いたしました。総説は被引用数も高く、本誌としても重視しております。なお、来年1月には、本誌国際化のためラインナップを強化している海外編集委員を執筆者とする総説特集号を予定しております。また、ホームページ、Facebook、論文表彰(Hot Article Award、年間 Best Paper Award、Most Cited Paper Awardなど)を通じた広報活動にも注力しております。

さて、「学会の本質」(壹岐伸彦先生、本誌2017年9月号とびら)ともいえる Anal.Sci. 誌の編集業務に向き合っていく際の私の理念として、読者、著者、学会にとって「三方良し」を挙げたいと思います。なお、編集委員会は、読者、著者、学会の「三方」の要に位置します。まず、著者と編集委員会とのやり取りを通じて、データの質向上とあいまいな点の解消など、論文としての質が上がれば、読者は分析化学の最新の成果を正しく理解できるようになります。ひいては将来的な引用数の増加につながります。さらに、編集業務が充実していることを著者が実感し、投稿リピーターになってくれれば、論文をより多く集めることが可能となります。最新かつ良質のデータを有する論文が多く発表される学会誌を有することは、日本分析化学会の国際的なプレゼンスと分析化学分野の認知度の向上にもつながります。

ただ、上記のように投稿論文に真摯に対峙し、速報性も確保する編集スタイルは、編集委員、査読委員、事務局に多大な負荷を与えるものでもあります。このためゆめ努力こそが学会誌のクオリティを向上させる源となりますので、私も副編集委員長としてこのスパイラルアップを進めるべく今後とも一層努力する所存です。

最後になりましたが、会員諸氏には以上の事情をご賢察いただき、本誌への積極的な投稿と引用、査読、広報活動等へのご協力を賜りたくお願い申し上げます。

〔Tomoki YABUTANI, 愛媛大学社会連携推進機構紙産業イノベーションセンター、  
「Analytical Sciences」副編集委員長〕